

資料紹介

ここでは、経済学部資料室収蔵の資料や、公開データベースなど、広く当室所蔵資料に関して紹介・解説する。

- 東京大学経済学図書館の歴史とその貴重図書
- 鉱山史料（中野家文書岐阜県鉱山関係史料）

解説

東京大学経済学図書館の歴史とその貴重図書

1. 経済学部創設以前

東京大学経済学図書館の淵源を辿ると、法科大学時代の経済統計研究室と商業資料文庫の開設に行き着く。経済統計研究室は、明治33（1900）年に、エンゲル係数（消費支出全体に占める食料費の割合）で知られる統計学者エルンスト・エンゲルの旧蔵書 14,000 冊余りの購入を契機として設置された。当時、ドイツ留学中であった高野岩三郎講師（のち教授）の尽力により購入が決定したという。このコレクションは「エンゲル文庫」と名付けられ、授業や研究に広く活用された。

近代以降の学術活動の源泉となったのは、明治維新以降に欧米から輸入した歴大な知識であり、経済統計研究室の収書もそのような情報基盤整備の一翼を担うものであった。「エンゲル文庫」以外では、明治43（1910）年に、田尻稻次郎博士の還暦記念として1万円の寄附があり、アダム・スミス『国富論』初版本をはじめとする洋書を購入し蔵書の充実が図られた（「田尻文庫」）。

他方、大正2（1913）年に開設された「商

業資料文庫」は国内資料に着目したものであった。これはドイツ人教師ジークフリート・ベルリネルの提案によるもので、国内企業の定款、営業報告書などを蒐集し、企業経済の実証的研究を促進した。知識輸入のための洋書蒐集だけでなく、欧米の手法を国内資料の収書に応用することも試みられていたのである。

2. 経済学部の創設より関東大震災からの復興まで

大正8（1919）年に法科大学より経済・商業2学科が独立し、日本初の経済学部が設置され、両学科の蔵書も引き継がれた。翌大正9（1920）年、新渡戸稲造教授は渡英した際、アダム・スミスの旧蔵書 303 冊を古書店で購入し、経済学部独立の記念に寄贈する。経済学部ではこれを「アダム・スミス文庫」と名付けて学部の至宝とした。

ところが、その3年後、大正12（1923）年9月1日午前11時58分、関東大震災が発生する。昼食時という時間帯と強風が相まって各地で火の手が上がり、東京大学も火の海となった。経済学部では教職員・学生が命を顧みず、「アダム・スミス文庫」をはじめとする貴重書籍 1,486 冊を救い出したという。しかし、その他の蔵書 4 万冊余は灰燼に帰してしまった。

震災復興策の中で、経済学部が最も力を注いだのは図書資料の整備であった。蔵書家への寄贈依頼、近隣図書館への重複図書の提供依頼、海外からの大量買い付けなど、蔵書再建のためにあらゆる手段が講じられた。現在、貴重図書に指定されている「メンガー文庫」はこの時の提供依頼に東京商科大学（現一橋大学）図書館が応えたもので、同館所蔵のメンガー文庫から同じ版本を別に所有していた

重複本 80 冊を買い受けたものである。

80 万冊を越える蔵書を有する当館の今があるのは、震災復興期に貴重な書籍を快く譲渡された機関や個人、復興に携わった教職員の努力の賜だと言える。図書館書庫内の古い書籍を繻くと、標題紙に捺された「為震災復興」との印影が散見される。そこには震災復興に尽力した先人達の思いが込められているのである。

3. 昭和から平成へ

震災復興後は 20 万冊収容可能な書庫に加え学生閲覧室も設置され、図書の集中管理を進めて、教員や学生が必要に応じて随時利用できる体制が確立された。しかし第二次世界大戦により再び受難の時代を迎えることになる。B29 による本土空襲が本格化したため、昭和 20 (1945) 年 2 月には、図書の疎開が計画された。同年 6 月中旬から 7 月にかけて、第一次疎開が実行され、「アダム・スミス文庫」などの稀覯本が山梨県内に移送される。

8 月には終戦を迎え、以後の図書疎開計画は実施されなかったが、震災とそれに続く劣悪な環境下での疎開により、「アダム・スミス文庫」の劣化が深刻な状態となっていた。昭和 29 (1954) 年には、破損資料が 290 冊を超え、中には触れることすら憚られるものも多数あったという。このため大河内一男教授は同文庫の本格的な修復を決断する。資料保存の理論が体系化されていなかった時代に、厳密な原形保持の原則を貫いた約 3 年の作業により「アダム・スミス文庫」は息を吹き返したのである。

戦後から平成にかけての歴史の中で、昭和 41 (1966) 年に経済学部が新棟（現在の赤門総合研究棟）を建設して移転したことは、図

書館にとって大きな画期となった。新棟には地下 1 層地上 7 層で 50 万冊収容可能な書庫、閲覧室、図書事務室等が設けられた。同時に各種の規則類も整備され、貴重図書、準貴重図書の取り扱いについても明文化された。

図書館では最新の研究情報の整備に加え、古典籍や原史料の収集にも力を注いだ。「アダム・スミス文庫」は購入や寄贈により冊数を漸次増やし、現在では 314 冊になっている。また、震災で失われたとされていた「エンゲル文庫」も当館や総合図書館の書庫内から発見され、1,166 冊が復原された。さらにイギリスの社会改革家であるロバート・オウエンに関する資料（「オウエン文庫」）、マルクスやケインズの書簡などの稀覯資料、古文書や企業資料などもコレクションに加えられた。

平成 22 年 (2010) には、経済学部図書館から東京大学経済学図書館に改称し、図書・雑誌を扱う赤門総合研究棟の図書館、貴重図書・企業資料や古文書を扱う学術交流棟の資料室の 2 部門体制となった。資料室は資料保存に関するマネジメントも担い、マイクロフィルム化やデジタル化なども資料保存の一環として位置付けている。経済統計研究室の設立から 112 年目の平成 24 (2012) 年度には、「アダム・スミス文庫」をはじめとする西洋古典籍 507 点 (約 12 万コマ) のデジタル化を実施した。これにより、本カレンダー所載の貴重図書も装幀から内容に至るまで全世界にデジタル配信されている。(講師 こしまひろゆき 小島浩之)

【編集部附記】

本稿は東京大学大学院経済学研究科・経済学部において制作した「2014 CALENDAR」の末尾に解説として執筆したものである。カレンダーは消耗品であるため、内容保存と今後の利用の便を考

慮し、原文の誤植等を訂正した上での転載を了解いただいた。

新収資料 (4)

こうざんしりょう なかの けもんじよ ぎふ けんこうざんかんけいしりょう 鉱山史料 (中野家文書岐阜県鉱山関係史料)

本史料は、福岡県嘉穂郡川津村(現飯塚市)中野家文書の一部である(同家文書の本体は、九州大学記録資料館産業経済部門に架蔵されている)。点数は1,247点であり、岐阜県大野郡三谷銅山及び同吉城郡天生金山関係の文書が多い。平成25(2013)年度に整理を終え、『鉱山史料(中野家文書岐阜県鉱山関係史料)目録』として刊行したので、ここでは目録の解題に記したことをごく簡単に紹介する。

三谷銅山・天生金山のいずれも、江戸時代から稼業する、岐阜県飛騨地方の鉱山であった。鉱主の中野徳次郎(1857-1918)は、福岡県筑豊地方の中規模炭鉱経営者であり、農商務省鉱山局技師の細井岩弥のグループに資金を供与し、両鉱山の経営に当たらせた。明治38(1905)年12月に三谷銅山を、翌39年9月に天生金山を買収し、九州中野本店、東京出張所、飛騨出張所の三者体制により両鉱山の再開発を行った。しかし石炭不況のため、同41年6月に天生金山の製錬所建設計画は中止され、細井グループは撤退した。三谷銅山は大正元(1912)年に、天生金山は同14年に売却され、中野家による飛騨鉱山経営は終焉を迎えた。

本史料は、明治38~41年にかけての、三谷・天生両鉱山の経営史料が全体の8割以上を占める。東京出張所の日誌、三谷・天生鉱山関係の諸簿冊及び元帳類、綴じから外れたバラの文書、明治40年11月制定「天生金山規則」(写真参照)、両鉱山及び中野徳次郎が

試掘申請を行った全国各地の鉱山の図面など、年次は限られているが、鉱山経営の詳細を知りうる好史料である。また、明治42(1909)~大正7(1918)年の中野家の私文書も200点余り存在する。本史料が多くの方々に利用されることを願ってやまない。

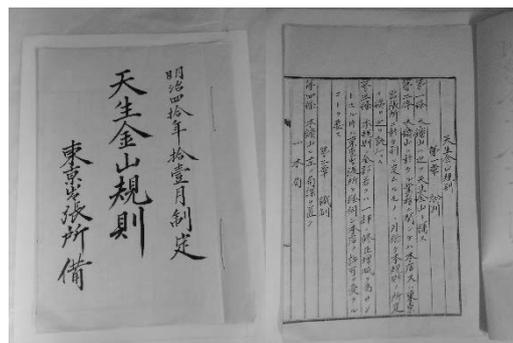


写真 明治40年11月「天生金山規則」(文書番号56)

【参照文献】

『鉱山史料(中野家文書岐阜県鉱山関係史料)目録』東京大学経済学部資料室, 2014.3

(特任専門職員 富善一敏)